

〔第187回明専塾（本田技研工業株）〕

次世代技術への対応力

情報工学府先端情報工学専攻M1 木下 涼太



令和2年1月17日（金）、飯塚キャンパスにおいて第187回明専塾が開催されました。講演内容は、本田技研工業株式会社でご活躍されている4名のOB・OGの方々による各研究開発事業の紹介でした。

ホンダは二輪、四輪、汎用製品の製造・販売事業以外にも、ロボットや航空機などの新規事業の開発も手掛けています。就職活動を進めていく中で、国内・世界における自動車産業の存在感を意識するようになり、今回の明専塾への参加は私にとって非常に有意義なものになるだろう、と考えていました。

最近、自動車業界でよく耳にする

CASEという言葉は、コネクテッド、自動運転、シェアリング、電動化といった次世代の技術トレンドを指します。講演の中で、現在、自動車はCASEの波によって100年に1度の変革期を迎えていること、また、社会人としてその変化に対応するこ



講演の様子

とが重要である、というお話が、技術者として活躍することを目指す一員として、特に印象的でした。

また、ホンダのCASEに対する取り組み事例として、4輪制御開発現場の話を聴講しました。具体的には、EV車両の制御技術を開発する現場では、モーター性能を最適に引き出すことと、自動運転の安全性を確保することの両方が要求されることでした。このお話を聞く中で、CASEという、相互の技術が強固に絡み合った次世代の技術課題に対して、一人ひとりが熱い思いを持ってモノづくりに取り組める現場が、ホンダにはあることを強く感じました。

講演会後に行われたグループディスカッションでは、ご講演いただいた社員の方と、課題を通して交流する場を設けていただきました。実際に企業の方々と交流することで、ホンダのモノづくりに対する姿勢や考え方を体感することができました。今後就活を控えている学生にとって、このような形式の懇親会は、非常に貴重な機会になりました。

最後になりましたが、この場をお借りして、今回ご講演をいただいた福田桃子氏（情知H25卒）、平井美紀子氏（情機H26卒）、内藤秀晴氏（電電H9卒）、雲丹亀真剛氏（設機H9卒）と同社の諸先輩方々、及びこのような貴重な機会を設けていただいた明専会の方々に心より御礼申し上げます。

（令和2年2月記）



グループディスカッションの様子